

④地域の見守りで困った時に相談する人

見守りで困った時に相談する地域の関係者としては、町会長やネットワーク委員をあげている人が多かった(表30)。

表30. 地域の見守りで困った時に相談する人
・ネットワーク推進委員へ相談する。
・困ったときは地域の推進委員の方、または町会長さんにする。
・ネットワーク推進委員会、連合町会。
・ネットワーク委員に連絡、町会長に至急に連絡出来る体制をとっている。
・社会福祉協議会、地域ネットワーク、推進委員さん、各町会、自治会。
・経験者や福祉ネットワークの人。利用する人の身になって活動する。
・町会の役員に相談している。
・近所に町会の役員さんがおられるので困ったときはすぐ相談します。
・町会長→連合町会長、役所又は推進委員→さざなみ。
・町会長さん等、班長さん等。
・地域包括支援センター、保健センター(保健師)に相談する。
・さざなみが近いので相談したいと思う。
・住之江区役所内保健福祉センター。
・福祉会館への問い合わせ。
・まずお世話になっている福祉会館へ相談している。
・区役所、福祉。
・区役所。
・先輩のボランティアや福祉行政にたずさわる人。

⑤地域の見守りに対する意見

地域の見守りに対する意見では、見守りについては困難なことも多いが、できることから地道に活動を続けて住みやすい地域にしていきたいという前向きな意見が多かった(表31)。

表31. 地域の見守りに対する意見
・これから十年先になり年をとると自分のことで人様に助けを借りる年代です。今は少しでも人の力になりたいと努力しております。どなたでも挨拶をして顔を覚えてもらうことを努力して行こうと思っております。出来るだけ外に出て行っております。
・見守りについてはまだまだいらぬお世話みたいなどころがあり、そっとしておくことも大切だが、その反面、近所の方との情報交換をしてゆくようにすることが大切だと思えます。見守りについての協力して下さる方が少ない。
・私自身は現在は子ども達対象の見守り活動に力を入れている。孫のことも頭に入れながら・・・健全に事故なく、登下校出来るように見守っている。朝の「おはよう運動」、下校時の見守り等。
・私は見守り活動には参加しておりません。町会、連合町会のボランティアとして食事サービス、喫茶、子ども見守り隊、その他自分の出来ることには進んで参加しております。私自身も高齢者ですが、まだまだ元気ですので、出来るだけお手伝いしたいと思っております。
・遠くから嫌がられない程度でしか関わられません。“プライバシー”の壁は矢張り厚いようです。緑地域には公団(都市住宅機構・わかぎの団地)がありますが、町会・自治会的な組織がないために連合町会に加入していませんので情報が把握できません。
・地域の人達とこれからもコミュニケーションをとっておかなければならないと思う。

2. 見守り組織地域住民と専門職へのインタビューと質的分析

1. 目的

本章では、高齢者のセルフ・ネグレクトおよび孤立死を防ぐための地域見守り組織のありかたについて検討を行うために、見守り組織メンバーとなっている地域住民と見守り組織を支援してきた専門職へのインタビューデータを基にした質的帰納的な分析を行った。地域における見守り組織のありかたを検討する際には、それぞれの地域の住民組織体制や地域性による違いをふまえることが必要である。

本研究では、当該研究プロジェクトの対象地域のうち、既に見守り活動を数年にわたって実施している地域として大阪市住之江区を選択し、見守り組織メンバーや見守り組織を支援してきた地域包括支援センター等の専門職がとらえている見守り対象となる高齢者の状況、見守り支援のためのテクニックや組織づくりを検討することを目的としている。なお、分析対象とした市は、大阪府下の都市近郊市として特徴づけられる。

2. 方法

1) 調査対象者と方法

本研究のデザインは質的帰納的研究である。

調査対象者は、見守り組織メンバーとなっている地域住民と見守り組織づくりを支援してきた地域包括支援センター等の専門職である。地域住民については4人、見守り組織を支援してきた専門職については、3人である。なお、地域住民については、2地区を選択し、面接を実施した。

面接は2009年1月に、インタビューガイドを用いた半構成的面接を研究者らが実施した。面接時間は約 60 分程度である。面接の形態は、個別に実施した場合とグループで実施した場合がある。対象者の概要と面接の実施状況については、表1に示すとおりである。

表1 住之江区住之江地区・南港緑地区におけるインタビュー対象者の概要

[見守り組織の地域住民]			
面接状況	事例	性別	地域での役職
グループ面接1	S1	女性	地域ネットワーク委員
グループ面接1	S2	女性	地域ネットワーク委員
グループ面接2	S3	男性	地域ネットワーク委員会推進員
グループ面接2	S4	男性	地域ネットワーク委員長

[地域包括支援センター職員]			
面接状況	事例	性別	職種
個人面接1	S5	女性	主任ケアマネージャー、介護福祉士
個人面接2	S6	女性	看護師
個人面接3	S7	女性	社会福祉士、ヘルパー

インタビューガイドの内容は、大まかには「①調査対象者の知っている事例」と「②見守り支援に関する内容」とに分けられる。インタビューガイドは見守り組織の地域住民と専門職はともに、同様のものを使用した。

前者の「①調査対象者の知っている事例」については、在宅高齢者における孤独死の事例、見守りが難しい事例、見守りの必要性の有無が把握できない事例、孤立している住民をうまく援助できた事例およびできなかった事例について、できるだけ具体的に把握できるようにたずねた。

後者の「②見守り支援に関する内容」については、当該地区の見守りネットワーク活動で困っていること、当該地区見守りネットワークが行っている活動や行政・専門職との連携状況、当該地区見守りネットワークが果たすことのできる役割と今後の課題、高齢者の孤立や孤立死防止のために行政や専門職に求める役割、見守り組織をつくるまでの今までの経緯および地域包括支援センターや住民の働きかけや役割などについて、把握することを意図してインタビューを実施した。

以上のインタビュー内容について、調査対象者の同意を得て IC レコーダー等に録音し、逐語録を作成した。なお、すべての対象者から録音の同意を得ることができた。

2) 分析

逐語録から高齢者の孤立死、見守り支援のありかたや組織づくりに関連すると思われる内容を意味毎にくぎり、可能な限り、対象者の表現を活用し、コードをつけた。さらに、コードをもとにカテゴリを作成し、さらにカテゴリをまとめて、テーマとした。これらの分析過程では、研究グループ内で数回にわたり、討議を行い、コード、カテゴリ、テーマ等の表現と分析の適切性を確保するように努めた。

3) 倫理的配慮

調査対象者には書面と口頭で本研究の趣旨、目的と方法を説明し、対象者から文書にて同意を得た。また、調査協力は自由意思に基づくものであり、いつでも中止可能であること、研究目的以外では得られたデータを使用しないことを説明した。なお、本研究は、甲南女子大学看護リハビリテーション学部研究倫理委員会から承認をうけて実施している。

3. 結果

1) 見守り組織の地域住民へのインタビューの質的分析結果

見守り組織の地域住民へのインタビューから得られた質的分析についてのテーマとカテゴリを表 2-1、表 2-2～4 に示す。

表2-1 見守り住民に対する面接から得られた質的分析結果の概要

テーマ	カテゴリ・コード
孤立死のとらえ方	元気な人が独りで急に亡くなることもある 見守っていても独りで急に亡くなることもある 見守っていても孤立死を完全に防ぐことはできない 見つけることは可能
孤立死発見のプロセス	新聞がたまっていて孤立死に気づいた 電気がついたままだったので孤立死に気づいた 悪臭があったので孤立死に気づいた 中で亡くなっているのがわかっても、住宅会社が鍵を開けてくれない 作業（配水管）予定の日だった お風呂で亡くなっていた 亡くなった方の妻が認知症だった
見守り対象となる高齢者	人に頼ろうとしない高齢者 人とのつながりを拒否する高齢者 近所づきあいから孤立している高齢者 集まりに誘っても反応しない高齢者 高齢者でない見守り対象者 独居

表2-2 見守り住民に対する面接から得られた質的分析結果の概要

テーマ	カテゴリ・コード
見守りのためのテクニック	見守りの訪問より、サロンを勤める方がとっかかりやすい 対象者には見守りからかわり始める 見守りを行うための対象者への働きかけ 変化があれば声をかける 相手の気持ちに立ち入りすぎないで、見守る 高齢者と長い間付き合っていると見守りをしやすい 管理組合の名簿から見守り対象者を把握 地域の活動では、高齢者のみという枠を外す

表2-3 見守り住民に対する面接から得られた質的分析結果の概要

テーマ	カテゴリ・コード
見守り困難な点	個人情報が入手できない 家の中まで入り込むことが難しい 誰が見守り対象者かわからない 集合住宅は情報把握が困難 町会に入らない住民が多く、活動低下している

表2-4 見守り住民に対する面接から得られた質的分析結果の概要

テーマ	カテゴリ・コード
見守りのための組織作り	既存組織があり、見守りに活用しやすい 行政と連携をとる必要がある 見守りをシステム化する リーダーがいれば、地域はまとまる 組織づくりの核が大切 子育て時の付き合いが地域づくりに生かされている 近隣住民の見守りは孤立死予防に役立つ 近所同士で助け合いたい 支援する対象の枠を作らない 課題に向けて何かしようという思いが大切 学習会をする サポートしている人の思いをくむ仕組み作り

(1) 孤立死のとらえ方

テーマ「孤立死のとらえ方」に関するカテゴリとコードの一覧については表3に示すとおりである。

表3 テーマ「孤立死のとらえ方」に関するカテゴリおよびコード一覧

テーマ	カテゴリ・コード
孤立死のとらえ方	元気な人が独りで急に亡くなることもある ここ2、3年40代50代の人々の孤立死が圧倒的に伸びてきている。 見守っていても独りで急に亡くなることもある 一緒についているわけではないので孤立死は防止できない。 孤立死を防ぐことは不可能なので、いかに早く発見するかが大切である。 孤立死ゼロは絶対に難しい。 見守っていても孤立死を完全に防ぐことはできない 気をつけなあかんと思ってもコテっといったらわからない。 見つけることは可能

(2) 孤立死発見のプロセス

テーマ「孤立死発見のプロセス」に関するカテゴリとコードの一覧については表4に示すとおりである。

表4 テーマ「孤立死発見のプロセス」に関するカテゴリおよびコード一覧

テーマ	カテゴリ・コード
孤立死発見のプロセス	<p>新聞がたまっていて孤立死に気づいた 家の前に新聞がちょっとたまっていて孤立死に気がついた。</p> <p>電気がついたままだったので孤立死に気づいた</p> <p>悪臭があったので孤立死に気づいた 悪臭があるということで発見することもある。</p> <p>中で亡くなっているのがわかって、住宅会社が鍵を開けてくれない</p> <p>作業（配水管）予定の日だった</p> <p>お風呂で亡くなっていた</p> <p>亡くなった方の妻が認知症だった</p>

(3) 見守り対象となる高齢者

テーマ「見守り対象となる高齢者」に関するカテゴリとコードの一覧については表5に示すとおりである。

表5 テーマ「見守り対象となる高齢者」に関するカテゴリおよびコード一覧

テーマ	カテゴリ・コード
見守り対象となる高齢者	<p>人に頼ろうとしない高齢者 自分は元気だと思っている。 頑固で見栄を張る。</p> <p>人とのつながりを拒否する高齢者 閉じこもって鍵を開けない。 自分勝手。</p> <p>近所づきあいから孤立している高齢者 班長や隣と付き合いが全くない。</p> <p>集まりに誘っても反応しない高齢者 集まってくる方は元気な方ばかりで、そこに入れない人をどうするか。</p> <p>高齢者でない見守り対象者 独居 身寄りがいない。 家族が遠方。</p>

(4) 見守りのためのテクニック

テーマ「見守りのためのテクニック」に関するカテゴリとコードの一覧については表6に示すとおりである。

表6 テーマ「見守りのためのテクニック」に関するカテゴリおよびコード一覧

テーマ	カテゴリ・コード
見守りのためのテクニック	<p>見守りの訪問より、サロンを勧める方がとっかかりやすい 会食会では楽しんで帰ってもらおう。 会食会の目的は、ふれあいと引きこもり防止。 サロンあるんですよ、と声かけしたら喜んでくれる。 地域のイベントを設ける。</p> <p>対象者には見守りからかわり始める 80、90歳以上の方の年2回の「ゆうあい訪問」での声かけを行っている。</p> <p>見守りを行うための対象者への働きかけ 耳の悪い人には電話より文章で届ける。</p> <p>変化があれば声をかける 心配な人に「何かあったらうちに言ってきてね」とは言っている。 「ふれあい喫茶に来ないし、聞いてみよう」と思った。</p> <p>相手の気持ちに立ち入りすぎないで、見守る 相手の気持ちに立ち入りすぎてもいけない。</p> <p>高齢者と長い間付き合い合っていると見守りをしやすい ずーっとの顔と顔との付き合いが大事。 家族から連絡が入るようにしている。</p> <p>管理組合の名簿から見守り対象者を把握 敬老のプレゼントの時の名簿を作っている、チェックできる。</p> <p>地域の活動では、高齢者のみという枠を外す 高齢者のみを対象とするのではなく、いろんな世代がくるボランティア喫茶を作った。</p>

(5) 見守り困難な点

テーマ「見守り困難な点」に関するカテゴリとコードの一覧については表7に示すとおりである。

表7 テーマ「見守り困難な点」に関するカテゴリおよびコード一覧

テーマ	カテゴリ・コード
見守り困難な点	<p>個人情報が入手できない 守秘義務の壁があり、電話番号を教えてもらえない。 どこにだれが住んでいるかの情報が欲しい。 公団が住人の情報を教えてくれない。</p> <p>家の中まで入り込むことが難しい 連絡するしないの、境の判断が難しい。 線引きが難しい。 警戒心を持たれる。</p> <p>誰が見守り対象者かわからない 60代の若い人を対象としてない。 若くても病気という人がわからない。 認知症など精神面はわからない。</p> <p>集合住宅は情報把握が困難 ワンルームマンションが増えた。 マンションだと把握しづらい。 管理人がいない。 市営はオープンだが、オートロックだと分からない。</p> <p>町会に入らない住民が多く、活動低下している 誰かわからない。 町会に入らない住民が多い。</p>

(6) 見守りのための組織作り

テーマ「見守りのための組織作り」に関するカテゴリとコードの一覧については表8に示すとおりである。

表8 テーマ「見守りのための組織作り」に関するカテゴリおよびコード一覧

テーマ	カテゴリ・コード
見守りのための 組織作り	<p>既存組織があり、見守りに活用しやすい 既存の老人会に入っている人は情報を得やすい。 既存組織をまとめ連合体にする。</p> <p>行政と連携をとる必要がある 行政と住民との情報の共有が必要。 行政は補助金だけで動こうとしない。 役所の無駄を削り、地域に回して欲しい。</p> <p>見守りをシステム化する デイとさざなみに登録していたら、どちらかがチェックできる (見守りの連携)。</p> <p>リーダーがいれば、地域はまとまる リーダーとなる人がいることで、地域はまとまる。</p> <p>組織づくりの核が大切 自分が中心で情報をまとめたい、まとめる予定。</p> <p>子育て時の付き合いが地域づくりに生かされている 行政が0歳からの子どもで組織を作ってる。</p> <p>近隣住民の見守りは孤立死予防に役立つ ヤクルト・新聞配達の方が情報をくれる。</p> <p>近所同士で助け合いたい 隣が電気や新聞などを気をつけて見る関係がよい。 様子を覗いてくれる仲間ができるとうい。 隣りの人がボランティアという関係が理想的。</p> <p>支援する対象の枠を作らない 広げるため。 一緒に頑張れる。 負担軽減のため、ボランティア層の厚さが必要。</p> <p>課題に向けて何かしようという思いが大切 一人暮らし、認知症の方の災害時の対応、地震の時などの対応 を考えないといけない。 友愛訪問、見守り隊を作っていこう。</p> <p>学習会をする 認知症、糖尿病(ボランティアスクールについて)。</p> <p>サポートしている人の思いをくむ仕組み作り ボランティアもするけどしてもらおう、他人の行為を受け取る姿 勢も必要。 お互い様という気持ちが良い。</p>

2)見守り組織づくりを支援している専門職へのインタビューの質的分析結果

見守り組織づくりを支援している専門職へのインタビューから得られた質的分析についてのテーマとカテゴリを表9に示す。

表9 専門職に対するインタビューから得られた質的分析の概要

テーマ	カテゴリ・コード
見守り対象となる 高齢者	家族や近所とつながりがない高齢者 介入を拒否する高齢者 ごみ屋敷に住む高齢者 生活環境が保てない高齢者 精神症状がある高齢者 認知症がある高齢者 介護者が息子である高齢者 介護認定者
高齢者への支援	頻回に関わり信頼関係を作る 住民や見守りメンバーから情報をもらい、支援につなげる 見守りのサインとしての生活ぶりを把握して介入する 本人を受け止めて信頼関係を作る 多くの職種が関わって支援する 関わりが深まることによってサービス導入につなげる 安心感を持ってもらえる関わりをする
組織・地域への支援	メンバーと顔をつなぎ、連絡をもらえる関係を作っておく 見守り組織が出来上がっている 見守り組織が十分ではない 組織化や社会資源の開発が重要である 個別対応にメンバーが動くように関わる 新しく望まれる支援内容 ブランチ連絡会での連携
支援の困難な点	情報把握後どうするのか難しさがある 情報を共有できない 集合住宅の人はつながりが希薄で見守りがいきわたらない 見えない虐待は対処しにくい 高齢者が支援の必要性を感じず介入できない 活動が不活発な地域は組織がない 独居である限り孤立死予防は難しい 講義や研修で得た知識だけで物事を見ってしまう 制度の限界 家族が拒否する

(1) 見守り対象となる高齢者

テーマ「見守り対象となる高齢者」に関するカテゴリとコードの一覧については表 10 に示すとおりである。

表10 テーマ「見守り対象となる高齢者」に関するカテゴリおよびコード一覧

テーマ	カテゴリ・コード
見守り対象となる 高齢者	家族や近所とつながりがない高齢者 近所の人とつながりを持たず孤立し状況がわからない。 ずっと家の中だけで生活している。 デイサービスに適応できなかった。 「あそこの姉妹は」と偏見を持たれていた。 町会に入っていない。
	介入を拒否する高齢者 玄関先で「私は大丈夫ですから来ないでください」という。 「一人でずっと生きてきたので、人様の世話にはなりたくない」という。 家族の介入を拒否する。
	ごみ屋敷に住む高齢者 ごみ屋敷になっている家は気にしておかないといけない。
	生活環境が保てない高齢者 認知症機能が下がり服装も入浴もトイレもひどい人についての連絡が入った。
	精神症状がある高齢者 全裸で包丁を持って近所を走り回った。 もともと統合失調症であった。
	認知症がある高齢者 話しているうちに認知症とわかり、医師のところに連れて行った。
	介護者が息子である高齢者 息子が高齢者の生活保護費・年金をあてにしている。
	介護認定者 要支援1、2の認定者。

(2) 高齢者への支援

テーマ「高齢者への支援」に関するカテゴリとコードの一覧については表 11 に示すとおりである。

表11 テーマ「高齢者への支援」に関するカテゴリおよびコード一覧

テーマ	カテゴリ・コード
<p>高齢者への支援</p>	<p>頻回に関わり信頼関係を作る 頻回に、ほとんど毎日状態確認を行った。 何らかの形で毎日アプローチして孤独死が防げた。 片付けなどをさせてもらいながら近づき、何かあったらすぐ対応できる状態にしていた。 毎日訪問していると拒否していた人も受け入れてくれるようになる。 介入できるようになるまでに、意図しない状態に陥る。 配食サービスを週一回の訪問で定期的に行う。 サービスのない日でも動けない場合など本人から連絡がある。 知的障害、精神症状のある人に声かけを行うことで直ってきた事例がある。</p> <p>住民や見守りメンバーから情報をもらい、支援につなげる 民生委員がキャッチした情報で包括に相談があり支援につながった。 家族が駆け込んで相談にきた。 大家さんから包括に苦情が届いたため、看護師・社会福祉士・支援ワーカーと大家さんで訪問した。 住民が早期に発見してタイミングよく受診と治療につながった。</p> <p>見守りのサインとしての生活ぶりを把握して介入する 新聞や郵便物が溜まっているなど、本当に生活に密着したところで見つけられる。</p> <p>本人を受け止めて信頼関係を作る 多くの職種が関わって支援する 1ヶ月間民生委員、近隣、包括、保健センター、在介センターが毎日見守っている。 他職種で見守りを開始し、頻回に訪問して受診につなげていった。 「看護師がこの近辺の血圧を測って回っているので来ました」と言ったら玄関に入れてもらえた。 財産管理のため、司法書士に頼み後見人を選出した。 悪い方向に行くかと思うことも、やってみた結果、良い結果を生むこともある。 新聞配達員や商店街などにも協力的になってもらい、何かが起こる前に情報を得る。 家族・地域・専門職が連携して動く。 配食サービスの弁当屋さんが倒れているのを発見。 生活保護の人は役所のケースワーカーが入って関わる。 警察や消防署に協力を求めたり、会議に参加してもらったこともある。 要支援の人はケアマネが3ヶ月に1度訪問するとともに、毎週サービスが入ることで変化などに対応し見守る。</p> <p>関わりが深まることによってサービス導入につなげる 「あなたとだったら入る」という人を作ってくれ、お風呂に入るようになった。 息子さんに声をかけることで介護保険の滞納をうまく支払ってもらえた。</p> <p>安心感を持ってもらえる関わりをする 誰かがいつも自分を見てくれて、自分に関心を持っていてくれるという安心感。 何か困ったことがあるときは、この人に相談すればいいんだという安心感。</p>

(3) 組織・地域への支援

テーマ「組織・地域への支援」に関するカテゴリとコードの一覧については表12に示すとおりである。

表12 テーマ「組織・地域への支援」に関するカテゴリおよびコード一覧

テーマ	カテゴリ・コード
組織・地域への支援	<p>メンバーと顔をつなぎ、連絡をもらえる関係を作っておく 民生委員と連携の構築が重要である。 何かあった時に包括の職員の顔がぱっと頭に浮かんでくれるような関係を作る。 気軽にSOSを出せる状態を作る。 メンバーの立場や活動を知る。 近所の人を心配する気持ちを大事にする。 ネットワーク委員50、60人に集まってもらい、講演会を行うことで、ネットワーク構築を推進していく。</p> <p>見守り組織が出来上がっている ケースの前にネットワークの仕組みがもともとあった。 先祖代々住んでいて、村の人がお互い全部知っているところは見守り隊がしやすい。 ケア会議を行い、一緒にケースを考えていく。 要支援でもすぐ手のかかる人はいるが、30人程度なら動ける組織づくりはできている。 「おまもりネット」や「お年寄り110番（西淀川）」に希望者を登録し、台帳などに載せ、地域で管理して定期訪問などにより見守っている。</p> <p>見守り組織が十分ではない 組織に参加したがない人がある。 介護保険の対応に追われたり、事務仕事が多いため実際に活動に取り組むのが難しい。</p> <p>組織化や社会資源の開発が重要である 高齢者に限らず地域の組織化をしたいと思っている。 ネットワークは地域で見守る雰囲気づくりに必要な活動である。 各校区、各地区に地域活動が広がっていく啓発ができればと思う。 広く人を集めて見守りを行いたい。 近隣の人から情報を得るための啓発をしていく。 利用しやすく垣根の低いサービスをする。 行政や専門職と連携し、情報を共有できるシステムを作ることが必要。 ネットワーク推進員さんとのつながりが一番大きく、地域の困った人の情報を共有する。 見守られる側も来てもらうのを待つだけでなく、積極的に動くのが大切。</p> <p>個別対応にメンバーが動くように関わる 緊急保護の場合は会議なしで即保護する。 経済的問題解決と介護サービスの見直し、適切な介護サービスへの変更をしていくことが大切（たいてい改善する）。</p>

テーマ「組織・地域への支援」に関するカテゴリおよびコード一覧(つづき)

テーマ	カテゴリ・コード
<p>組織・地域への支援</p>	<p>新しく望まれる支援内容 住民自身がネットワークを作るようにもっていかせらなと考 えている（特に協力者が多くない地域で）。 世話役がなくても顔を合わす機会のない人が時間を決めて、 茶や菓子を持ち寄って自分たちで集まれるものを作りたい。 実際に動ける見守りボランティアの養成を行い、小さな地域 での実践の手伝いを行う。</p> <p>ランチ連絡会での連携 扱ったケースの報告や地域の関わりが大事だと思われるケ ースについて話し合う。 実際に連携して、というのはまだまだあまりない。</p>

(4) 支援の困難な点

テーマ「支援の困難な点」に関するカテゴリとコードの一覧については表 13 に示すとおりである。

表13 テーマ「支援の困難な点」に関するカテゴリおよびコード一覧

テーマ	カテゴリ・コード
支援の困難な点	<p>情報把握後どうするのか難しさがある 情報を得て、ここにこういう人が住んでいるとわかって、それ以上踏み込めない。</p> <p>情報を共有できない 個人情報保護の壁により民生委員と情報を共有できない。実態把握ができず、どうすればよいかわからない。色々なところを経由するうちに情報にズレが生じる。</p> <p>集合住宅の人はつながりが希薄で見守りがいきわたらない マンションの人は近所づきあいを好んでいない。マンションや団地は近隣の付き合いが薄いので隣の家の名前すら知らない。近所づきあいの経験があまりなく、出てくる気のない人を引っ張り出すのは困難。団地に来る人はあちらこちらから来るので把握しにくいところもある。</p> <p>見えない虐待は対処しにくい 親子関係があるので関わりが難しい。</p> <p>高齢者が支援の必要性を感じず介入できない 本人に孤立している実感がない。</p> <p>活動が不活発な地域は組織がない どういう活動を行っているか浸透していない。</p> <p>独居である限り孤立死予防は難しい 頻りに会議も行い見守りをしていたが、気にしていた矢先に転倒、骨折して入院し、老人ホームで亡くなった。隙間を作らないようにしていても、防ぎきれないこともある。</p> <p>講義や研修で得た知識だけで物事を見てしまう制度の限界 要介護が低い人はヘルパーが週二回しか入らない。服薬の見守りができず、もともとの病気（精神疾患：統合失調症など）により動けなくなる。サービス不足により二次的に筋力の低下などを招く。ネットワーク委員を活性化しようとしても他の役職でいそがしかったり、昼間は仕事をしており、訪問を行うことができなかったりする。地域の実情を知って各地域ごとの必要な支援を探していく必要があるが、難しい。個別の援助に追われ、地域を包括的に見ていくレベルになっていない。要支援2は幅があり、要支援2にしては元気すぎたり、大変過ぎたりする人がいる。</p> <p>家族が拒否する 年金で一緒に食べていることを知られたくないので、介入・援助をさせない。「自分が面倒をみるから大丈夫」と介入・援助をさせない。</p>

第4章 まとめ

1. アンケート調査のまとめ

1) 見守り組織の特徴と課題

特徴

- ・回答者の役職は町会が45%、ボランティアが47%であり、2つ以上の役職を兼務している人もいた。
- ・回答者の65%は「校区に人は信頼関係が築きやすい」と感じ、地域の人はいくつの場合「人の役に立ちたいと思っている」と感じている人は65%であった。
- ・回答者の地域に対する愛着の程度は、愛着があると感じている人が、75%であった。
- ・回答者の近所づきあいの程度は、61%が「立ち話程度」であり、「生活の面で協力する」は、28%であった。
- ・近所づきあいの人数では、「地域の半分程度の人」が61%、「地域のほぼすべての人」が28%であった。

課題

- ・ネットワーク委員会の認知度について「知っている人」が4割に対して「あまり知らない」から「無回答」が6割近くを占めていた。
- ・ネットワークの評価について35%の人が「感謝している」と答えている。無回答が50%と多かった。

2) 日常の見守り活動と状況と課題

状況

- ・地域ネットワーク委員会としての実行活動は、活動内容と思うものと同様に「見守り活動」と「交流の場の開催」、「相談活動」が多い。

課題

- ・ネットワーク活動は一定の効果があり評価できるものの、無関心な人の存在が多いなどの住民の意識の変化や実態に応じた活動にしていくには、見守り活動に参加する人数を増やして活動の活性化を図ることなどの工夫が求められている。

3) 見守り活動の実態と課題

実態

- ・現在の見守り対象者がいる人は44%であった。また、「いる」と答えた人の役職は民生・児童委員が78%と多かった。
- ・見守り世帯は「一人暮らし」が71%、「高齢者のみの世帯」が66%であった。
- ・見守り方法は、「訪問」と「電話」がそれぞれ13%で「近隣から様子を伺う」が15%であった。
- ・見守りの頻度では、「適当である」と答えた人がほとんどであった。
- ・見守りに至った経緯では「近所の人からの相談」、「ネットワーク委員会からの情報交換」が多くを占めた。
- ・見守りの効果では「困った時には相談してくれるようになった」「困っている方の援助につな

がった」「地域の方々の結びつきが強くなった」「困っている方を早期に把握できた」などの効果がみられた。

- ・担当地区の高齢者の人数が「わかる」と回答した人は64%であった。
- ・ふれあい事業を認知している人は86%であり、79%の人が活用していると回答した。
- ・孤立死という言葉を知っている人は88%であった。
- ・担当地区で孤立死の危険が高いと考えられる方の有無では「いる」が34%、「いない」が37%、無回答が29%であった。
- ・孤立死の危険が高いと判断した理由は、「近所づきあいがない」が最も多かった。

課題

- ・見守りの対象者の状態では、健康障害や認知症・寝たきりなどの健康問題を抱えた状態が主であるが、経済面・家庭環境の問題もそれぞれ13%であった。
- ・見守りの際に留意していることは「健康状態」が84%と最も多いが、多岐にわたり留意されていた。
- ・見守り基準は「決めている」が8%で、「決めていない」が71%であった。
- ・見守りが困難な点として、見守りの対象の状況が分からない、自分一人では見守りの荷が重い、本人や家族から見守りを拒否されることが挙げられた。
- ・見守り困難な点に関して解決策では、地域の人々に協力を得るという意見が多く、行政や、介護支援専門員との連携の必要性などがあげられていた。また、民生委員からは、役職の兼務を減らすことで、見守りに専念できる可能性が記載されていた。
- ・担当地区の高齢者で情報が得られにくい方が「いる」と答えた人は54%、「いない」が44%であった。
- ・見守り活動では、認知症高齢者への対処で困っているという意見と共に、民生委員との連携で見守りがうまくいったという記述もあった。さりげなく支えていくこと、隣近所が協力し合うことの大切さと共に、行政からの見守り対象者の名簿の提供を希望する意見などが挙げられた。
- ・過去に孤立死があったと回答したのは、41%、「ない」は48%であった。
- ・見守りネットワークで孤立死を防げると思うと回答した人は47%であった。
- ・孤立死を防ぐために、①家族や本人ができることは日常的に付き合いや連絡を取り合うこと ②地域でできることは隣近所の声かけや訪問・情報交換をすること ③行政および専門機関に求める役割では個人情報などの情報の提供や、場所や資金の提供 ④地域の見守りで困った時に相談する人は町会長やネットワーク委員会がそれぞれ多かった。
- ・地域の見守りに対する意見では、困難も多いが、出来ることから地道に活動を続けて住みやすい地域にしていきたいという前向きな意見が多かった。

2. インタビュー調査のまとめ

1) 見守り組織メンバーへの面接調査のまとめ

・孤立死のとらえ方

元気な人が急に亡くなったりすることや、見守っていても孤立死を完全に防ぐことは困難であるかもしれないが、発見はできると考える。見守り困難な人では、町内会等に入会しないために情報が得られない人達であるが、地道な活動を繰り返し実施していくことが求められる。

・孤立死発見のプロセス

新聞が貯まっている、電気がついたままである、悪臭がある、配水管の作業予定日であった、風呂で亡くなっていたなどの事例の報告があったが、発見のプロセス上の課題として住宅公社は

住宅内で死亡しているのがわかっても鍵を開けてくれなかったことや、亡くなった人の配偶者が認知症であり、対応が難しいなどの現状を踏まえた対策が求められる。

・見守り困難な点

見守りが困難な点は、個人情報が入手できない、家の中まで入り込むことが難しい、誰が見守り対象者かわからない、集合住宅は情報把握が困難、町会に入らない住民が多く、見守り活動が低下しているなどであった。

2) 地域包括支援センター職員への面接調査のまとめ

・見守りの対象となる高齢者

独居であること、人に頼ろうとしない、介入を拒否する、家族や近所とのつながりから孤立し、集まりに誘っても反応しないなどであるが、高齢者ではないが見守りは必要な人の存在も視野に入れて検討することが求められている。

生活環境が整えられない、要介護認定者、精神症状や認知症があること、介護者が息子の場合などは支援が難しい。

・支援方法：頻回に関わっていき、信頼関係を作ること、住民や見守りメンバーからの状況してもらい支援に繋げる。安心感を持ってもらえる関わりや、本人を受け止めること、関わりが深まるとサービスの導入に繋がられ、今後の活動の糸口になる。

・見守りのためのテクニック

見守りの組織作りでは、現存組織があり、見守りに活用しやすいことを活かして、行政との連携をとりながら活動する。また、支援する対象者の枠（年齢や障害などの）を作らないこと、近所同士で助け合うこと、学習会等を通じて必要な情報を得て活動の幅を広げたり、サポートしている人の思いをくみ取る仕組み作りが大切。

対象者の把握では管理組合の名簿から把握するなど具体的な方法を検討し、見守りの方法は訪問するより、サロン等への参加勧誘がきっかけになることが多い。相手の気持ちに立ち入りすぎないで見守り、何か変化があれば声をかけるなどがよい。長い付き合いの経過の中で見守りはしやすくなるため、地道に活動を続ける。

・見守りの組織作り

仕組み作りには、サポートをするされる双方の思いを汲む仕組みが大切で、お互い様という気持ち芽生えることが良い。子育てでの付き合いが地域づくりに活かすことができる、近隣の見守りは孤立死予防に有効であり、行政との連携は欠かせない。

メンバーとの顔をつなぎ、連絡がもらえる関係づくりをしていくが、あくまでも、地域によって見守り組織のレベルは多様であり、その地域にあった組織化作りが求められている。

3. まとめ

1. 地域特特別見守り組織の特徴と課題

両地区共に地域ネットワーク委員会というシステムが存在し、近隣レベルでの見守り活動を通して生活課題が生じたときには、迅速に専門機関・専門職につなぐなどの、地域でのコーディネーター役として活動を展開している。その活動の内容は様々な工夫を凝らしながら地域特性

に合わせた活動をしているものの、見守りを真に必要としている人への支援としての確にその人のもとに届いているか否かでは不透明な部分も存在するのではないかと推察する。それは、今回のインタビューで明らかになったこと、すなわち自治会の加入者が少なくなっていることであつたり、両地区とも府営住宅など公営住宅が存在し、低い賃貸料金であることから心身の問題や経済的課題を抱えた住民の入居が増加する傾向や、さらに近年の傾向から管理者のいないマンション等が増加するなど、見守りを困難にし、課題を複雑化する要因になっていると考えられるからである。

なお、住之江地域では、御崎福祉会館老人憩いの家を拠点に、安否確認と親睦を目的とした食事サービス、閉じこもり予防と交流を目的とした地域デイサービスの他、生きがい作り・健康づくりを目的とした民謡・パッチワークなど各種クラブ活動も盛んに行っており、活動は高齢者に限定したものではなく、各年代に広く働きかけていることが特徴的である。これらは将来を見越した取組であり評価できる。また、平成19年度の個別援助活動では友愛訪問が300人と、訪問活動も活発であり、平成21年度の活動も決定され、着実に新たなボランティア育成に向けて活動が展開されつつあり期待される。

南港緑地域でも、22名のメンバーでネットワーク委員会を結成し、南港緑公園福祉会館老人憩いの家を拠点に、独居や障がいのある高齢者等を対象として実態やニーズ把握を目的とした食事サービス、地域住民と高齢者のふれあいを旨とした喫茶やふれあい会、親睦や生きがい作りを目的とした民謡教室や小物作りの会などの趣味活動など活発に行っている。住之江地域と同様に活動対象は高齢者に限定したものではなく、広く地域づくりとしての視点は評価できる。また、様々な取組においてネットワーク委員の個人的な努力は評価できるが、地域全体が高層住宅であり、見守り活動は年々困難になっており、自ずと限界もあることがうかがえる。すなわち、高齢者を対象とした友愛訪問数を住之江地域と比較すると極端に少なく、その背景には住宅環境が大きく影響しているのではないかと推察する。住宅環境を考慮した活動の展開方法を開発していくことが最大の課題である。

2. 日常の見守り活動の状況と課題

上記のとおり住之江区における見守り支援のシステムや具体的な活動のあり方については、すでに地域ネットワーク委員会の長い活動の歴史がある。しかし、委員会が発足した当初から10数年以上の経過があり、社会環境も変化し、居住する住民の意識や価値観も微妙に変化している。それらの変化に応じて、柔軟に有機的に活動を展開していくには、様々な課題が存在する。従って、今後はこれまでのネットワーク委員会活動の見直しを行い、ネットワーク委員会としての活動内容を今以上に明らかにすること、中でも住民レベルでできること、できないことを明らかにして行政や地域の専門職と協働すること。そして、住民レベルで地域の実情に合わせて、専門職との更なる連携を図った見守り活動を展開する必要がある。

3. 専門職の見守り支援の有無による活動の実態と課題

専門職の見守りについては、個人的なレベルでの見守りに限定されているのが現状である。また、明確な見守り基準がないため、今後は個人的なこれまでの実績を集約したうえで、地域特性に応じた見守り活動を、地域の既存の組織と協働して展開していくことが求められている。

社会環境や住民の意識や価値観も微妙に変化していることから、それらの変化に応じて、ネットワーク委員会が柔軟に有機的に活動を展開できるためには、専門職のサポートが欠かせない。中でも、個人情報の保護に対してどのような取組をしていくかが最も問われていることである。本来、個人情報の保護は住民一人ひとりの個人情報を保護して、安全で快適な暮らしを保障すべき制度であるはずのものである。しかし、一方ではその名の下に見守りが必要な人を適

切に把握することを妨げる要因にもなっている。個人情報の保護と見守りの双方の目的を達成しつつ、必要時には迅速に、効率よく、適切に見守りがなされ、見守られる住民にとっては温もりが感じられ、緩やかで笑顔の絶えない見守りでなければ受け入れられないであろう。これらを達成するには、様々な創意工夫と努力が必要とされるであろう。そのためには新たな組織を作るのではなく、既存のネットワーク委員会のよさを活かした活動展開を、住民と協働していくこと最も重要であると考え。